
タクシー運転手の災難は続く

浮羽ゆう（早浪討矢）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タクシー運転手の災難は続く

【Nコード】

N9275E

【作者名】

浮羽ゆー（早浪討矢）

【あらすじ】

おっさん企画参加作品。落語と釣りと一人パフェをこよなく愛する、タクシー運転手のおっさんに降りかかった、幾つかの災難に関するお話です。

ノックの音にドアを開けると、アパートの薄暗い廊下には制服姿の警官が一人立っていた。

「AKB タクシーの運転手、島田耕作48歳、バツイチ独身、趣味は落語と釣り。：調書で読みましたが、これで間違いないですね」
「確かにその通りです。ただ、それに古今亭志ん生と一人パフェをこよなく愛する鹿児島出身と付け加えてくれれば完璧なんですが」
「……」

ランニング姿のアパートの住人が口走った返答。その、あまりのおとぼけっぷりに絶句した警官は思わず、ズレかけた大きめなサングラスのブリッジを、人差し指で軽く押さえて直した。

「おやおや、グラサンなんか掛けてるんですね？」

目ざといおっさんがすかさず問いかける。

「ええ、最近急に目を痛めまして、しばらく掛けるよう医者に勧められてるんです」

罰が悪そうに頬を赤らめて警官は呟いた。

「いえいえ、なかなかお似合いですよ。その濃いめの色合いがいい。世界を釣る男！ 松方弘樹みたいだ」

「すみません。どちらかというと松田優作のイメージなんですが」

「そっか、ジェネレーションギャップ感じちゃうな。おまわりさん歳いくつですか？」

「33です。って、そんなことより、ちょっとお話を伺いたいんですが」

サングラスで覆われた警官の顔の下で、わずかに苛立ちの表情が浮かんで消えた。

「そうですか、いよいよ年貢の納め時ですね」

「は？」

「いえ、一度言ってみただけです。えーっと、立ち話もなんですから、どうぞおありがとうございます」

タクシー運転手のおっさんは部屋の中に警官を招き入れ、三日前の夜のことを洗いざらい自白し始めた。

「……最初は出来心だったんです」

「えーと、すみません。さっきから何のことをおっしゃってるんですか？」

「……軽いジョークです。場を和ませようかと」

しかし、畳敷きの6畳の間に座らされた警官は、分厚いサングラス越しに非難の視線を浴びせる。

だって……、一人身で退屈してるんだもん。ちょっとぐらい話を脱線させたっていいじゃありませんか。という思いを胸に秘めつつ、薄っパゲのおっさんは会話を続ける。

「タクシー運転手って言っても、結局はサービス業でしょー」

——中には人と話するのが苦手って運転手もいるけど、やっぱりお客さんはね、なんだかんだいって会話をしたいって人が大半なんですよ。

でね、ニーズがある以上こっちも会話の引き出しってものを用意してなきゃいけない。その日の天候から街の経済情報、学校のことやら、市政のことまでね。特に今時分多く聞かれるのがやっぱり怪談話かなあ。夏ですから。

ほら、タクシーの怪談って多いじゃないですか。こういう業界ですから、ドコそこの運転手が……なんて話はすぐ伝わりますしね。タクシーの運転手がタクシーの怪談を話す訳だからリアリティーあるわけですよ。

ところが私、こう見えなくても怖い話ってのが大の苦手です。え？ どっから見てもそう見える。どこが？ 何々、線が細くて気弱そう？ ああそう。特に頭皮の辺りが逃避行してるって？ 失礼なおまーりだねまったく。

「すみません。何も言ってますんが」ちゃぶ台の向かいに座った警官が、小さな抗議の声を上げる。

「ちょ、ちよつと黙って聞いてもらえますか。こっちにもリズムってものがあるんだから。話の腰を折らないで」

「は、はあ」

「——と、それでどこまで話したっけね。変な野次が入るから忘れちゃったーい。そうそう、私、怖い話が苦手なんです。いえね、落語は好きなんです。でも、人情話やオチ話はともかく、怪談はいけねえ。聞いてたら落ちる前にあの世に昇ってっちゃう。カイダンだけにね。え、余計なことはいって？ つまんない客だよ。んなこっちゃ、折角出したお茶引っ込めちゃうよ。何々？ 今はお茶より饅頭が怖いって？ うまいねまったく」

そこまで話し終わると、満ち足りた表情にキラキラ輝く瞳で、相手の反応を待つ48歳バツイチおっさん。

しかし警官が冷ややか告げた言葉は

「真面目に話してもらっていいですか？」

その声はまるで、深い地の底からわきあがり、相手が立っている

土台のすべてをその濁流の中に飲み込み、闇へと引きずり込んでしまうような響きの声だった。

ランニング姿のおっさんは、心が折れた。

「すみません。今度こそ真面目に」

姿勢を正して座布団を整え、気を取り直して再び、制服の警察官に向かって話し始める。

「いえね。後から聞くとまるで笑い話みたいなんですがね——」

——その時は軽い怪談話のつもりでいたんですよ。

最近、この辺りの公園にバラバラ死体が捨てられてる事件とかあって物騒だったじゃないですか。だからお客さんにね、タクシー業界にまことしやかに伝わってる怖い都市伝説を教えたんですよ。

お客さん、知ってますか？

昔からここら辺りの街では、行方不明になる人間が夏場になると後を絶たないじゃないですか。

そして、その中で最後に見かけた証言というのが、決まって黄色いタクシーに乗ってどこかへ向かって行く姿を目撃されたものなんです。

でもね、この街にボディーが黄色く塗ったタクシー会社なんて存在しないんですよ。

どうやら犯人は、黄色い車をタクシーに偽装して、乗客をどこかへ連れ去って……

そのときです。後部座席のお客さんが小さな悲鳴を上げたのは。後部座席の内側から何かがトントン自分の背中を叩くって。

それまで、すっかり忘れてたんですが、たまたまその日仕事の合間に釣りをしてましてね。ええ、趣味でルアー釣りをしてたんです。で、夕暮れ時に河口付近で大きなスズキを釣り上げました。

その時ちゃんと、血抜きをしておけばよかったんですが、会社は無線で呼び出されて時間が無かったもので、ええ、今思えばお客さん勘違いしたんですね。トランクのクーラーボックスの中で魚が跳ねていたんですよ。そのあとは、まるでコントみたいなやり取りです。

「何かシートの裏から背中をドンドンやるんですが」とお客さん。

「ああそうそう、すっかり忘れてました。今日はちよっと焦ってまして、獲物をしめる間もなくトランクにつっ込んでしまったんですよ」

「獲物？ しめる？（なんだ？ まさか…… 首を絞める？）」

「普段なら、ナイフで傷を入れて血を抜いてしまうんですけど、今日はなかなかそんな余裕がなくて」

「血を抜く！ 余裕って！（やべえ、さっきの人さらいの話、実はこの人自身の話か？）」

「大丈夫ですよ、お客さんを終わらせたらちゃんと処理しますから動いてるなら、まだ腐ったりはしませんよ。けっこう大きかったですよ。スズキなんですけど」

「腐る！ 鈴木？（うわあー鈴木さん殺したのか）」

「知りませんか？ 最近、港町の河口付近でよく見かけるって。あそこのスズキって結構有名なんですよ」

「有名？（ゲッ！ ターゲット絞ってんだよ。有名な鈴木って絶対地元の土建屋グループ鈴木開発の社長のことだよ）」

「ええ、前々から狙ってたんですが、今日は日没まで粘ったかいがありました。網にかけたときの暴れ具合には、軽く性的興奮を覚えましたがよ。はっはっはっ」

「……（この人、ココまで話すなんて絶対オレもどっか人気のないところで殺る気だ）」

後から考えると、その時お客さんリアガラス越しに窓の外に目をやってから、ものすごい形相に変わってました。軽く震えてたし、なんかトイレでも行きたくなったのかな？　くらいに思ってたけど、今思えば車のボディーの色を見て震えだしたんでしょうね……。いえいえ、うちの会社は白いタクシーなんですけど、なんせその時夜中の橋の上を走ってたもので。道路照明のナトリウムランプのオレンジに照らされて、きつとボディーの色を黄色と錯覚させたんでしょう。

しばらく走って道路わきにコンビニが見えたとなん「ココで車を停めてええええ!!」なんて、大声で叫ばれちゃって、驚きました。で、やっぱりトイレなんだなと思ったら、一万円札差し出してきて「釣りはいらなから、とっとと帰ってください!」

「で?」

警官が合いの手を入れる。

「まあでも、しばらく待ってみたんですが、結局お客さん戻ってこなくて……。ま、今にして思えば当たり前ですが」

「なるほど」

「で、慌てたお客さんが忘れてった荷物のポストンバッグだけが後部座席に残されてたって訳です」

「それで、警察署に？」

「はい。普通なら会社に持ち帰ってしばらくは預かるんですが、さすがにねえ。だって、中を開けたらびっくり、ボストンバッグから出てきたのは……」

「切断された、人の腕だった」

代わりに警官が事務的な口調で告げた。

「そ、そういう事なんです。結局私、車にバラバラ死体遺棄事件の容疑者を乗せていたんですね。あゝ、くわばらくわばら」

「お気の毒です。で、その容疑者の特徴なんですが」

「署でもお話したとおり、よく覚えてないんですよ、あのお客様さんがどんな顔してたのか。いたって平凡な顔付きって気はするんですけど」

「思い出せんか？」

「……はい。どうも、その手の物覚えってえのがあまり芳しくありませんで」

「でも、時間が経って見たら思い出すって事もありますよ」

「そうかもしれないが……　ところで、犯人ってまだ捕まっていんですか？」

「未だ逃走中です。捜査は難航してまして、あなたの証言が鍵にな

るかもしれません」

「そうなんですか。すみません。もう一度見かけたら思い出すかもしれないですが、何せコレといって特徴のない顔立ちでしたから」

「いやいや、お気持ちわかりますよ。でも念のため、もう一度あのときのことを思い浮かべてみてくれませんか」

「今ですか？」

「今すぐ」

「頭の中で？」

「はい」

警官が、少しばかり喰い気味に頼み込んでくる。

「じゃあ、わかりました。やってみます」

相手のひたむきな態度に報いようと、脳内メモリーを必死に探るタクシーのおっさん a g e 4 8。

「何か浮かんできました？」

警官が尋ねる。

「うーん、もやもやとしか」と答えるおっさん。

「いいですか？ ココが大事なんですよ」

そして警官は黒い大きめのサングラスを外し、ニヒルな薄笑みを口角に湛えてこう続けた。

「その人、こんな顔してたでしょ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9275e/>

タクシー運転手の災難は続く

2010年10月11日15時59分発行